

せたかむい

発行・古平町史編集室
古平町文化会館 342-2590
第156号・平成14年9月1日

年表で読む

古平の歴史

《62》

タラ漁

■出稼ぎ漁民

古平だけではなく岩内・高島・余市などのタラ漁は、特に庄内（山形県北西部）地方から出稼ぎの漁師が起こしたもので、明治二〇年代でもこれらの漁師たちによって行われ、土地の漁師でタラ漁をする者は極めて少なかったといえます。

出稼ぎに来る漁師たちは漁期が近づくと、一〇人くらいの組をつくってその土地で米・みそ、その他の仕込みを受け、川崎船に乗ってそれぞれの土地に行き番屋や場所を借りて漁を始めます。そして五、六月になって漁期が終わると漁獲物を売って収益を分配します。

食料費、雑費などを引いた残金を漁具一人分、漁船一人分、船頭一人三分、平若者一人分、女四分の割合で分けたといえます。

江戸時代の終わり頃には、同じように鯨漁の時期になると本州や道南地方からも、仲間や一家を挙げて来ていました。

■本州から古平に移住

明治一九年の古平外二郡役所（古平・美国・積丹郡）の引継ぎ文書に、次のような内容のことが書かれています。

「鰯漁業改良のこと」

今まで鰯釣りをする漁師は、その時期になると越後（新潟県）地方から渡って来て多くの漁をしている。しかし、漁期が終わると毎年帰国してしまう

が、土地の漁師も鰯釣りをすれば利益も少くないだろう。そこで、タラ釣りの技術を習い漁をやるように勧誘したいと考えている。」

タラ漁は、早くから越後・庄内で行われていましたが、蝦夷（北海道）との交流が深まって来るとまず道南辺りで始まり、ここから日本海岸を北の方へ、また一方は東の方へと進んでいったと考えられます。これによって日本海方面では岩内郡沖合、太平洋方面では釧路郡沖合、がタラ漁場の中心地でした。そして漁の期間は出稼ぎをする漁師が増えてきました。

慶応二年（一八六六）漁獲量
岩内郡 六〇〇石（四五〇ト）
釧路郡 四三二石（三三三ト）
（古平・美国・古宇郡もやや盛んであった、とあるが漁獲量の記録は無し）

古平に来ていた漁師も定住する人はなく、明治三〇年代の末頃、ようやく小林五太郎・本間銀松・須貝松太郎・松田力三郎といった人たちが定住し始めました。そして漁の合間に農耕に従事する人もいましたが、その

時期が遅かったため、土地の払い下げなどの恩恵を受けることが出来ないで、副業としていた農業をやめて漁業を専業とするようになったようです。

明治四年（一八七二）漁獲量
古平郡 二二九石（一七二ト）
美国郡 一〇九石（八二ト）
古宇郡 一六八石（一二六ト）
岩内郡 二〇八石（一五六ト）
△北海道水産調査報告巻一△
岩内では明治一五年頃、越前（福井県）や庄内地方の漁師が移住して来てタラ釣り漁を始め、相当の漁獲があったといえます。△岩内町史△

その後、岩内では早くからスケソ漁にも進出するようになり、大正の末から昭和初期にかけては道内でのスケソ漁の先進地でもありました。

■明治三〇年頃の漁法

タラ漁の漁法は釣りか網で、始めの頃は漁師たちはそれぞれの出身地で使われていた漁具や漁法でしたがそれらに改良を加え、次のような漁具、漁法でした。

▽ゴロタ縄 初期の漁具
▽底延縄 漁船に六人乗り、延

縄を一直線か平行にはく
(延縄などを海に入れるこ
とを縄をはくという)

▽浮延縄 一人乗りで、一月上
旬から三月下旬まで

延縄の餌にはニシン・イ
ワシ・タコ・ホッケ・ブリ

・小サバ・秋味など

▽刺 網 二人乗りで、一二月

中旬から一月中旬までの魚
体の肥満している時期

ゴロタ縄についてはこんな説
明があります。

「一本の幹系に釣針を一〇本ば
かりつけ、幹系の下端に石の錘
をつけた流し縄である。これを
海中に投げ入れて魚が食いつい
たら強く引く(これを方言では
あわせると言う)。このような
ことを数回繰り返して残りの釣
針が少なくなったら、しばらく
そのまましておく。これをナ
ガシと言う。そして全部の釣針
に食いついたところこれを引き揚
げるのである。ゴロタ縄は渡島
地方に見られ、底が岩礁で延縄
の使用ができないところで用い
られた。渡島地方以外で全く見
られないのは、後にタラ漁の発
達した地域では延縄が新しい漁

具として発明され、それが有効
な漁具であつたためかも知れな
い。」(北海道漁業志要)

このことから考えると、古平
でゴロタ縄が使用されたという
記録はちよつと疑問です。

■活躍した川崎船

「川崎船」と呼ばれる和船は昔
から日本海沿岸での代表的な船
型で、古平では戦後まで使用さ
れていました。

日本海沿岸の港から津軽海峡
を越えて、鯀漁やタラ漁の時期
になると後志地方まで来ていた
のです。五人から八人程が乗り
組んで五丁から七丁の櫓(櫓Ⅱ
ろ)で漕ぎ、高速で航海性に優
れた船でした。この川崎船があ
つて当時のタラ漁が行われたと
も言えます。

古平辺りで使用されていた川
崎船は一二メートルから一五メ
ートルの長さがあり、鯀漁の時期には
その船足の速さから、鯀の梓船
(鯀を入れた大きな網袋を船底
に吊り下げて、鯀を海岸近くま
で運ぶ船)を引くのにも利用さ
れていました。

北海道のタラの漁獲量は、明
治一〇年前には一か年平均して

△古平沖でのタラ漁
漁場が遠いためか、古平のタラ漁
の様子を知る写真は全くありませ
ん。これはたった一枚しかないタ
ラ漁の貴重な写真です



一、六五〇石(一、二三八ト)程
でしたが、明治二〇年頃には
七、八〇〇石(五、八五〇ト)に
もなりました。このように漁獲
量が急増したのは川崎船のよう
な改良された漁船によって、漁

場が広がったことなどが大きな
理由ではないかとも言われてい
ます。

また、漁獲されたタラは製品
に加工される割合が高く、その
産額も年々増大しました。

タラ漁の発展に期待した北海
道庁ではタラ漁場の発見に努
め、利尻・礼文周辺に有望なタ
ラ場を発見したことから、古平
でもこの方面に出稼ぎする船が
現れるようになりました。

この頃の漁獲高は次のよう
でした。

郡名	明治31年	明治33年
余市	四〇二ト	一五九ト
古平	三八〇〇円	二六七七円
	一〇五〇ト	八八七ト
美国	一四七九六円	八六四六円
	七五ト	五一ト
積丹	一六七円	八二六円
	三三八ト	一四九ト
	三三四四円	一〇九八円

古平・美国・余市のタラ漁
は、四ギメートルから二八ギメ
ートル程の沖合いに出漁してい
て、一二ギメートルから二七ギメ
ートル(丸山が約二〇〇ギメ
ートル)の深さ
のところで漁をしていたよう
です。

大正一〇年

6/23 この頃は毎日毎日よく天気が続くものだ。今日は近來にない暑さだ。ナギなので本陣の浜へ行つて見たが、油を流したような静かな海だ。子どもたちも大勢泳いでいて、ツブやガンゼなどをとっている。海でなければこんな楽しみはないだろう。

6/24 平安丸が入港した。風があるので荷物は入船町^田の浜へ揚げる。越中屋の倉庫に六〇個余り預かり、あとは馬車で店の方へ運搬する。

6/26 今日は青年団、軍人分会、自転車会連合の運動会がある。子どもたちを連れ九時頃見に行く。なかなか盛大だ。平の小屋で休み、そばとビールを飲む。

7/9 琴平神社祭礼だ。山車が浜中、沢江、入船町、港町から各一台、外に子どもの山車が八台、合計一二台が出た。

7/18 朝六時頃から突然の大雨が降り出す。盆を覆すような雨だ。夕方になりようやく止む。畑へ行つて見る。キウリも早

いものは二寸ぐらいいになり、カボチャの花着きもよい。

7/19 昨日の雨がうそのように晴れ上がった。農園では大根まきの時期だ。オランダ菊の植え替えをする。○さんからアバ縄の交渉がある。美国の大謀用とのことだ。五、六〇〇丸も入用とのこと。勉強しなければならぬ。夜になって力が急に出

高野名幸作さんの日記から

当分の世相を見る

【57】

て来たようだ。

7/20 学校は今日は授業が二時間で、明日から夏休みだ。左官屋さんが来て二階の粗壁を塗る。(八から電話がありアバ縄一〇〇丸入用とのこと。夜、散髪に行く。

8/9 起床七時。朝夕はよほど日が短くなった。リングは不作で農園も暇なので、先日から古いリングの樹を切った。全部で四〇本余りも切ったが、薪にして二〇敷以上もある。土場の松坂さんを頼んで薪用に切り

割ってもらうことにした。二、三〇分程雨が降ったがすぐに晴れた。蒸し暑いせいか力がひどい。△大謀からアバ縄一〇〇丸取りに来る。△には今まででアバ縄三〇〇丸程も売った。

面白がって聞いていた。話は伊藤博文の少年時代、母の家庭教育についてであったが多くの感動を与えた。実に少年時代の教育は大切なことだ。一時に終わり、それから昼食をとられた。裁縫室で有志に扇面に記念に揮毫(きぎ)をしてくれた。その後すぐに出発された。私どももハシケで見送りしたが、古平での歓迎ぶりに先生も満足された様子であった。

8/10 快晴、炎熱の天気だ。九時頃から強風が砂塵を飛ばしてひどい。二時から積丹半島鉄道期成同盟会町民大会があり学

8/15 起床五時。まだ朝露がある中、ワラジはきで農園を見回る。カボチャ上作、ナスも良い。肥料も効いて手入れも良かったので木の勢いがある。キウリはもう枯れてきた。アジサイ、キキョウ、菊は盛り。ダリヤの赤と黄がようやく咲いた。今日と明日、競馬大会があるというので活気づいている。上天気だ。銀行の帰り納谷に寄り自転車修理をする。小雨だったが途中から急に降り出し、着物はずぶぬれだった。競馬大会から帰る大勢の人と出合う。

8/12 巖谷小波(いわきなみ)先生が古英丸で一〇時頃到着される。私も羽織袴でハシケに乗り出迎える。陸では花火を揚げ歓迎する。学校に案内し、三〇分程休憩されて講演がある。初めは学生たちへ、続いて父兄に対して講演された。子どもたちは

8/17 快晴、お盆なので町中も賑やかである。港町弁天さん(厳島神社)へ参詣する。石

段を上り新築の奥の院を拝する。小さい頃はよくここへ遊びに来たものだが、当時のことが追憶される。境内からの見晴らしのよいこと、気がせいせいする。帰ってから朝食。九時から学校で信用組合総会があるので行く。一五〇人余りが集まった。六千円の予算で事務所を一条通に新築すること。貸し付け限度額など改正する。神社のお祭りに稚児行列もあり賑やかであった。夕方墓参の後盆踊りを見に行ったが、大勢が集まりにわか芝居もあつて遅くまで賑やかであった。

8/18 朝夕が涼しくなり秋らしくなった。天気も快晴で浜辺の散歩も気持ちが良い。カニ縄、ミゴ縄の大口注文がある。秋にはカレ網も売れ行きが良さそうなので、早く仕入れねばならぬ。昨年から刺網の売れ行き予想外だった。茶の間の格子(三つ)の朝顔がきれいに咲いている。夜、墓参したがコオロギの音が秋らしい。トウキビもおいしくなった。

8/20 二十日盆で、朝墓参するので農園に寄って花を手折

ったが、いろいろな花で見事だ。帰り笹瀬さんに寄りトウキビやサイダーのご馳走になった。いろいろ話しをし九時頃帰る。町では電灯会社の技師や工夫が大勢来ていて、電柱を立てる工事をしていて。店へはアバ縄をかう客が大勢来ている。余市や小樽では品切れだということ。値段もよく、予想外の利益があった。夜は盆踊りも終わりなので、いつもより賑やかな声が聞こえてくる。

8/21 朝夕が涼しくなったようだ。盆もいよいよ終わる。小樽からのお客さんが帰るので本陣の浜まで見送りする。上ナギだ。お盆中は乗客も多いので今日は古英丸、富丸、金比羅丸の三汽船と、永寶丸、末広丸の計五隻が通っている。

8/22 毎日の天気続いだ。町内では電灯会社の工事が続いて活気づいている。店の前の方に道路をはさんで、近日中に事務所を建てるというので準備している。農園ではナスに虫がつき虫取りをする。

8/23 昨晩は丹前一枚では寒いくらい涼しくなった。秋ら

しくなった。農園もリンゴの作が良くないので寂しい。電柱が町内のあちこちに立ち都会らしくなった。点灯したらずいぶん町も良くなるだろう。権平さんに一二〇間売る。安いが一月までは宣伝もあるから仕方がない。前の空き地に、電灯会社事務所の建築用材やら石やら馬車で運搬している。浜町も活気づく。(モからの電話では、松山丸が佐渡から荷物を積み出帆したとのこと。大綱、アバ縄も来るだろう。夜、力がひどい。

8/24 学校では、余市で衛生展覽会があるというので、五年生以上二百余名が富丸で観覧に行く。昨夜雨が降ったが大降りもなく晴れた。午後、自転車で行く。正太謀へ行き、船頭さんと網のことについて話をする。この日、網三〇〇〇間程出た。今年は予想外の売れ行きだ。

8/25 朝夕は日増しに涼しくなってきた。今日は招魂祭で町内では国旗を立てる。正午、松山丸が入港する。早速荷物を受け取りに行き、田の倉庫に保管を頼む。△仲谷大謀へ大綱五五個分を届ける。

8/29 天気快晴。電灯会社から電灯の需要について聞きに来る。店に二燭光、一灯、部屋には一六燭光三灯、戸外に外灯一灯つけることにした。

8/30 着るものも単衣一枚では寒くなった。吹く風も涼しく虫の声にも秋らしい。暑い暑いと言っていたが早や秋だ。夏漁も無く浜は寂しい。

9/1 二十十日の厄日だが朝からヤマセが吹き、雨も混じって時化になる。ボツボツ出るが安い。これもここ暫くは辛抱せねばならぬ。

9/3 昨夜来の雨はずい分降ったが、今朝になって幸いに晴れた。六か月にわたって欧米を廻られた皇太子殿下が、今朝横浜港に安着されたということで、町中で国旗を立て、学校では奉祝の式があつた。終わってから、生徒や町内の有志も参加して郷社へ参詣する。東京や横浜では大変な賑やかさだとのこと。夜は小学校生徒、青年団のちようちん行列があり賑やかであった。

過ぎ去った日は遠くに

大 澤 文 子

特別に猛暑ということもなく夏は過ぎ、海の町にも急ぎ足で暦の上の「立秋」はやってくるのだ。毎年お墓参りをする頃には必ずといつてもいい程ドシャブリの雨に見舞われる。

「ほんとに：ホントにねエ：」姑（は）は小声でつぶやき、わずかな晴れ間を見つけてはお墓参りに出かけるのが常だった。私も、花模様の夏向きのネンネコに、まだ幼い次男をおんぶして姑のお供をしたものだった。

海際路に咲くハマナスの花も終わり朱実に変わる頃、沿道にはサワオグルマの花が咲きあたりを黄に染める。うつそうと茂る虎杖（アサギ）の葉群の中に、細やかな野菊の花が幾本か遠慮勝ちに伸び海風に揺れている可憐さ。土手下に群れ生う芒の穂も伸びたつ風情を見せ、はやあか穂がのぞいている。

そんな道を通るのが大好きな私だった。野菊と思つていた薄紫の細やかな花は姫女苑である。とあとから歌友にきき知った。

またその頃、買物物の行き来にはきまつて各家庭の垣根越しにみだれ咲くコスモスの花に歩みを止め、手を触れていた。

そしていつの日か九州の生駒高原へ出かけたことを思い出すのだった。コスモスの大群落があの高原の山肌を埋めつくし、まるで絵紙を張りつけたよう。その美しさ！ その壮大さを忘れることはない。

ちなみにコスモスの花言葉は「華麗、繊細、薄情でチョッピリ気の弱いところがある」と。なにか控えめの女性を思い出させるような花でもあるが、意外にも遅しく、雨風に倒れ萎えた茎からでも花を咲かせる。いまは秋桜と呼ばれ、歌詞にもうたわれ珍重されている。

砂浜に戯れ、遅しく日焼けした長男もいつか学齢となり、新品のランドセルを背に嬉々として登校するようになった。たしか入学時の受持ちは中村玲先生と記憶している。もの静かな優しい先生で、やんちゃな長男の

面倒を見、よく指導して下さったことを今でも思い出し感謝している。三年生になり、学級それぞれに会長が任命されたが、現古平町役場の三浦省三氏、丹後清市氏、それにわが家の長男であった。ふとその頃のことを思い出し、先日、夜、沢江町に住む丹後清市氏にお電話し旧交をあたためたものである。

ちょうどその頃か……。古平中学校長として橘先生が赴任されたのは。うれしいことに奥様がお琴の師匠とのこと。いち早く町内の少女たちが教えを請いに集まったのである。会場は割烹・大國屋さんと決まった。

わが家の隣の若松晴子さんが親切に誘って下さったので、学齢前の長女もお弟子さんの仲間に入ることができたのである。お琴の爪をピンクの小箱に入れ、スキップをしながらお師匠さんの所へ通う姿を見て、知り合いの方が、「みこちゃん！ お琴にゆくのネー」と、よく声をかけて下さったそう。稽古を終えて帰ってくるとすぐ練習をしていた。十三本の弦の上を力強く「ひめまつコ・マ・ツ」とよい音色を出し弾いていた。

お琴の発表会も年に一度あり、長女は中学校の末政先生に舞踊を習い、お姉さんたちにまじり舞台をつとめた。

何年かの間、町の中に和やかな琴の音色が流れ、楽しいムードが流れたのも橘師匠さまのおかげと、いつも感謝の念でいっぱいだったことを覚えてる。

その後、次男も学齢となり、入学した頃のことを今でも忘れられない思い出の一つ。

それはPT会員と共に浜町の斉藤呉服店の二階に集まり、女主人の淑子さんを囲み、毎年のバザーに出品する製品を作ったことだ。子供用の洋服を作るのが好きな私は、何着が毎年作り展示したものだった。

「大澤さんの作品はすぐ売れるよね」と、みんなに囁かれ、その気になって夢中でミシンを踏んだ若かりし頃であった。いつか子供たちもそれぞれの想い出を活かし、わが道をゆくと旅立っていった。

今夜もまた、遅くまでペンを走らせていた私に、窓辺のベゴニアの紅花がやさしく声をかけているかに見えた。「もうお休み……」——と。

古平いろはうた

フジ、サクラ 鯉も群れる偕楽園

□リンゴ園跡地に庭園

古平町で鯉漁場を経営していた二代目・山口金治は、たまたま日本三大名園の一つといわれる水戸の偕楽園を見物した折に、その庭園の見事な美しさに大変感動し、古平の名所に値するような庭園を造るのが生涯の自分の夢だと、常々家族にも語っていたそうです。

その旅から帰って間もなくのこと、ちょうど同じ入船町内で鯉漁を営んでいた分吉田幸朔（屋号いしか・吉田一穂の父）が、所有していた農園を売るというので早速それを買入れることにし、ここに念願であった日本庭園を造成することにした。大正七年春のことです。

ゴが植えられていました。

□偕楽園Ⅱ①公園

鯉漁が終わると、自分の漁場の漁夫たちも使つて地均しなどをし、その後は本州から庭師を呼んで本格的な造成に取りかかりました。庭木は本州からも取り寄せたものも多く、その種類もまた多彩なものでした。

側を流れる小川から水を引いて大きな池を造り、多くの鯉や鯉も放されました。

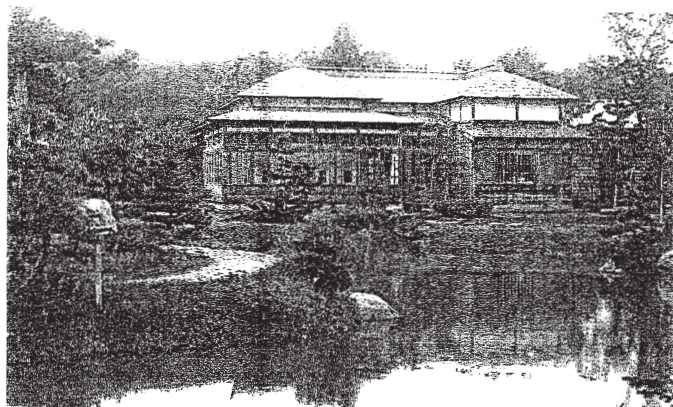
庭園に置かれた庭石の多くは歌楽周辺の海岸から採取され、農閑期になると農家の人たちが馬そりでその石を運んだのです。それを見ていた町の人たちは、どんな立派な庭が出来上がるのかと、町中の大きな関心を集めた話題になっていたといえます。

小波など多くの名士も訪れています。

またこの庭園は、①の公園として町民に親しまれていましたが町外にも広く知られ、春から秋にかけては訪れる人も多く、古平の名所として絵はがきも売られていました。

□残っている小庭園

本州からの庭師は、道路をはさんで向い側にあった小野寺地作さん（回想記を書いた高橋源吾さんの実兄）宅に宿泊していましたが、地作さんも庭に興味



⇒ 邸内の溪山荘の額・曹洞宗大本山総持寺貫主の揮毫
建築当時の別荘

があつたことから自宅にも池を配した小庭園を造成し、これが現在もそのまま残っています。

当主である巳代治さんは、

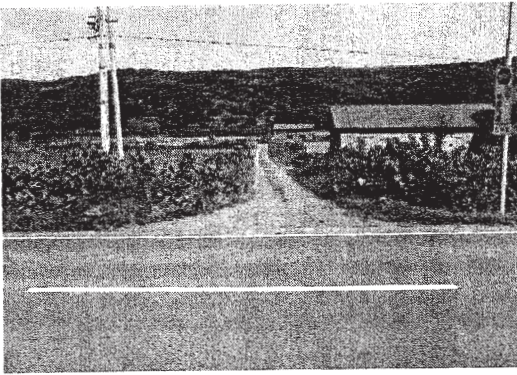
「畑の仕事が忙しくて、さっぱり手入れもしてなくて……」と言っていますが、小規模ながら専門の庭師による日本庭園のモデルを鑑賞できます。

□夢の跡Ⅱ古平・偕楽園

この公園は個人の造成によるものであり、戦後まで山口さんが個人で管理してきましたが、日常の管理のほか雪囲いが大き

な負担になっていったようです。それで町へ売却したいという意向があったようですが、当時は町も七二〇戸を焼失するという大火の復興に加え、中学校の新築や老朽校舎の建設という緊急な課題が山積していて、残念ながら契約することができないまま、農地として売却されてしまいました。現在は道道から入る小道と、公園にあった栗の大樹が二本寂しく残っているだけで、当時の景観を想像することすら出来ません。

← 道道から見たかつての④公園・偕楽園跡



— 高橋源吉回想記より —

まぼろしの 古平鯨公園

大正の中ごろから、当時、鯨場の大網元であり、古平の一大資産家であった④山口金治氏が所有していた畑町（現・栄町）に公園を造成し『偕楽園』と名づけたが、ここでは『まぼろしの古平鯨公園』としておく。

出来たころから古平の人たちは『④の公園』とか『古平公園』とかいって親しみ、誇りにもしていたのである。

当時所有していた畑の面積は三万平方メートル余り（約三ヘクタール＝約三町歩）といわれ、公園の広さはその内の約二万平方メートルと聞いている。広大なものであった。

この公園は四季折々の景色が良く、町の人たちが憩い、町外から見物に来る人も多く、園内は春・夏・秋といつも賑わっていたことを思い出す。古平の鯨漁業が盛んであった時代を物語る象徴でもあったのである。

山口金治さんは大変庭の好きな人であったと聞いている。本

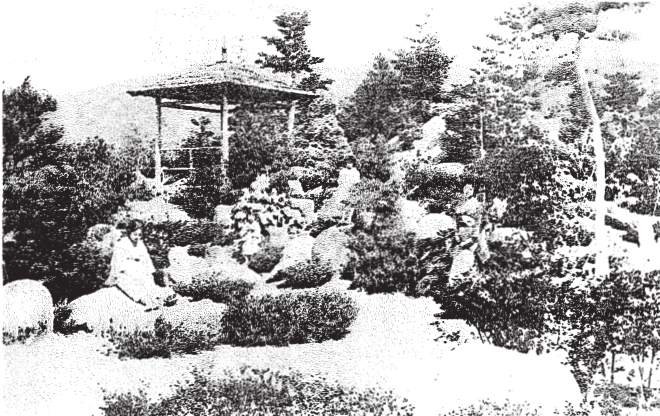


州から庭師を呼んで、大正六、七年ころから本格的に造園に着手したのである。その補助的な仕事に町内の人を雇入れ、いつも十数人の一団が賑やかに働いていたことを覚えていた。

私の家のすぐ前でもあったのときどき遊びに行つては見ていた。大きな池を掘り築山を造つていたが、土が不足すると家の裏から運んでいた。これは冬になると馬そりでやつていた。また、海岸から姿かたちの良い大きな石や、玉石などを集め

て置いては冬に馬そりで引いていた。大きな石は二頭引き、四頭引き、時には六頭引きで運んでいたが大掛かりの運搬作業でなかなか威勢がよく、浜町から畑町にかけて賑やかなものであった。こうして三、四年かけて数百個もの石が運び込まれ公園内に配置されていた。

樹木も沢山植えられたが、その種類も数も驚くばかりであった。当時、家の裏山からも、植





程もたつたようなトド松を、百本近くも公園に移植したように思う。

こうしてトド松・水松・杉・黒松・赤松・五葉松・イチヨウなどのほか、梅・桜・桃などの大きな株も植え込まれた。

その他、本州方面から取り寄せた珍しい四季折々に咲き誇る花木類や、赤や緑の紅葉類もあった。また、芝生も作られた。

「小野寺代治さん宅の庭園」

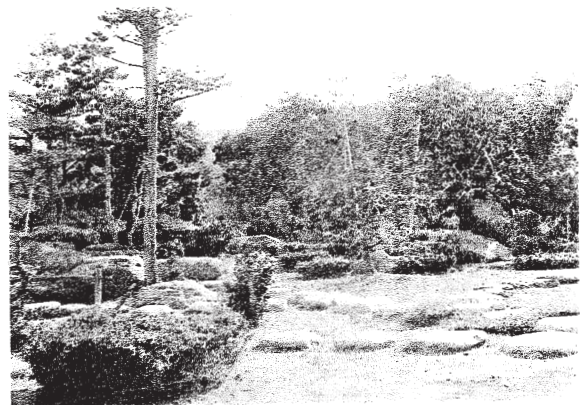
大きな池には、蓮・アヤメなどが植えられ、太く太くさんの緋鯉・真鯉・金魚を放し、これらの群団での遊泳は実に見事な美観であった。素晴らしいものだったと覚えていいる。

そしてこの池のほとり西側の一角には、凝った瀟洒（しょうさ）（しやう）な別荘が建っていて、園内の数か所には東屋や休憩所も作られていた。そして、公園の一隅には草花園や果樹園もあって、当時としては珍しい草花や果樹の類がたくさんあった。

また園内に、古平町の開拓の始まった明治初年、本州から持ってきた幼苗を植えたという、樹齢数十年の丹波栗十本ほどの一群があった。毎年秋になると大きな実がなつて、それを珍しく眺めていたものである。家で植えていた南部栗（小粒で山栗とも言っていた）よりはずつと大粒であった。この丹波栗の生育地は、古平・小樽辺りが北限であるという。

公園の入口には、当時、人目を引くようなハイカラな洋風建ての管理人住宅があり、若山さんの一家がここに住んでいた。

◇ ◇ ◇



①山口金治さんは、大変造園に熱心な方であった。専門の庭師を呼び、多額の費用を投入して造成をし、着工してから七、八年くらいもたった大正十二年頃にはほぼ完成した。

この頃から、古平町の春の花見や秋の紅葉見物の名所になったのである。

鯉漁期が終わる五月の花見ときには公園内を、花電気、で飾り、夜桜見物も大いに賑い盛大なものであった。

美国・積丹・余市といった近郊からだけではなく、札幌方面からも多くの見物客があり、こうして積丹半島随一を誇る公園

《偕楽園》となったのである。

◇ ◇ ◇

古平町やこの地方を来訪する名士のほとんどは、新地や本陣の浜で船から下りると客馬車を走らせてやって来る。中にはきれいなバラソルをさした女の人たちもいて、それが珍しくて眺めていたものであった。

来訪した人たちは園内の別荘で休憩し、景勝を眺め、鮎や山女、海の珍味を賞味しながら、地元古平の銘酒『縹燭』を酌んでは鯉沖揚げ音頭などを楽しんでいたようである。

こうした景勝の公園があったことから、当時の第九区部落会ではそれにちなんで部落会の名称も『古平町公園部落会』（会長小野寺地作）と改め、同時に市街に通じる本通りも『公園通り』と名づけたのである。

公園を造成してから終戦後までの約三十年間は、山口さんが自費によつて管理してきたもので、町民にとつては本当にありがたく、みんなが喜び、みんなが楽しんできたのである。

.....
この回想記は【せたかむい】72号・73号に掲載したものです。

木村シゲさんの語る 戦前の農家の暮らし

◇秋の収穫と収入

農家の一年の大きな収入は秋の収穫なので、豊作の秋は活気があった。それぞれの部落にある神社のお祭りも賑やかで、特に熊野サン（熊野神社）のときは浜町の方からも見物に来ていた。お祭りには少しだが小遣いももらえた。

一月の末には米の代金も入って来る。それで店の支払いにいくが、支払いはお盆の頃と年二回だった。払った分で、また買い物をして来るので、毎年少しづつ支払いは残った。

支払いに行った人が途中でイッパイやり、いい機嫌になつていても馬はちゃんと自分の帰るところを覚えていてから、馬は寄り道もしないで間違はなく帰って来る。鈴の音で馬の帰つて来たのがわかる。馬って利口な

もんだヨ。

◇馬

何たつて馬は一番の働き手だったし、子を生まして売つたりするので、どこの家でも馬は飼つていた。

農作業の外に、冬になれば浜のスケソや稲倉石から鉱石を運んでいった。専門に鉱石の運搬をする人もいて、よその町から馬を連れて来てやつていた。

稲倉石から浜町の④の浜まで運んでだけど、馬そりに鉱石を入れたかます七、八俵積んで、朝の暗いうちから晩の真つ暗になるまでやつて一日二回往復していた。天気の良いときは一回でもゆるくながつたようだ。一俵三、四〇銭したがなア。馬も人も大変だったけど、出面取りに行くよりエエ商売になった。

農家やつてで、中には一〇頭

ぐらいも飼つてそつちの方が商売の人もいた。馬の売買をする人を博労（ばろ）と言つてんだけど、古平の人はばろうつて呼んでた。

馬は一頭でも飼つてると世話もゆるぐなかつた。一家の大事な働き手だから人間と同じ。草刈りから馬の手入れ、馬ふん出し、秋には草をどんと刈つて、干し草にして外に積んで置く。それでも子つこを生むと大きな収入になつたし、メスが生まれると値段も高かつたから家中で喜んだもんだ。

その外、冬になると山へ薪切りに行つてた。一年中たたく薪を町に申請して、それを部落の人たちが共同で切り出す仕事もあった。朝の暗いうちに、腰に握り飯を下げてみんないつしよに山へ出かける。よつぽどの吹雪でもなければ毎日行つて、帰りも暗くなつてから「ひえだ（冷えた）、ひえだ」と言いながら帰つて来る。晩飯のときのイッパイが楽しみみたいだった。

◇家庭療法

今はすぐ薬屋や病院さ行くけど、昔は薬なんかめつたに使わ

ながつた。医者にもかからないで死んでいった人だつていた。『富山の薬』が頼みだつたし、どこの家でも薬になるものを用意していた。前はいろいろあつたが、今でも家にある。

・トチの実

どこの家でも作つていたが、これは足の腫れにはよく効く。昔は水に漬けていたが今は焼酎に漬けている。腫れたところにつけば特効薬だ。

・ドクダミ

干しておいて煎じて飲んだり、傷につけたりいろんな効能がある。昔はシラミが多かつた。シラミが頭につくと、刺されたあとが化膿してみんなガメと言つてた。ドクダミを空き缶に入れて火にかけ、どろどろにしたものを塗るとガメによく効く。今でも化膿したところや傷に使っているがようぐ効ぐよ。

―― 続く ―

【斉藤シゲさんのお話は、一ページ三回程度で終わる予定でいましたが、おもしろい話に予定を大きく超えてしまいました。上り下の三回で終るのがまだ続きますので、改めて番号にしました】

中 戦

泣き笑いの 樺太漁場体験談

戦 後 3

吉 野 慶 一 郎

●奥さんも樺太へ

スケソ漁が終わると、古平から来ていた人たちは皆帰つてしまふ。

あるとき、誰かが山川さんの奥さんに何か言つたらしい。

「あんた家のとうさんはナ、樺太サ行つて大したエエことしてゐるつてなア……」

それを聞いたのか奥さんは、次の年、それなら私も樺太へ行くといい出して、初めての樺太について来ることになった。わざわざ樺太まで渡つて来たのだまつていてもしょうがないので、奥さんには宿舎の賄いを手伝つてもらふことにした。

今度はいつも奥さんが側にいるので山川さんも、飲みに出るのにちよつと都合が悪かつたらしい。

山川さんは酒を飲んでも常に自分の立場を考え、絶対に深酒

や悪酔いをするようなことはなかつたし、飲むと陽気な人だつた。イッパイ入ると古平弁の得意の話芸？ が出て周囲の人たちを笑わせ、仕事になるとコワイ人だつたが人気者であつた。

また、野田の町ではおもしろいことに時化のときなど、行きつけの料亭や飲み屋のキレイなねえさん方が手土産持参で、店のPRを兼ねてか漁場にまで手伝いに来て、食事の世話などをしてくれる。こんなサービスがあると、夜になるとまたついでそちちの方へ足が向いてしまふ。

山川さんは仕事の上でも頼りになる人だつたが義理堅く、うちの漁場にとつての大恩人だつたと思つてゐる。敗戦後も、私が樺太に留まつていてその後帰国してからもうい分お世話になつた。亡くなられた今も感謝を

しております。

●いろいろな漁を手がける

主な漁はスケソ漁と、その後すぐの鯨漁だつたが、夏の間の漁も手がけてみた。

鯨漁の後はマス漁だつたが、五月末から六月末まで建網で獲つた。七月に入ると、流し網で夏鰾（あぶら鰾といつてゐる）を獲る。それが終わる八月から九月にかけてはイカ漁で、手繰りでカレイ・サメなども獲れる。

その網にタラバガニが掛かるが、カニは大手の水産会社の独占状態で、めすや規格に満たないものは禁漁であつた。警察が見回りをしているが、目立たないように処理されていたようだった。それから間もなくタラ漁が始まるが、一二月末になると流水が岸に寄つて来るので、これが一年の最後の漁になる。

海は凍ることはないが、常に流水は動いているので二月いっぱいには漁はできない。流水が見えないと思つて出漁したら、急に流水が寄つて来て漁具に大被害を受けることもある。見通しを誤るとこの時期とんでもない

ことになる。

●ウニ漁を始める

樺太の沿岸にはウニが沢山いたがそれは全部古平で言うガンゼで、古平弁で言えばそれこそしかさつてゐた。しかも大きくて身の入りもよい。

夏でも海水の温度が低くてとても海に入れないので、誰も採る人もいない。それでも日本人相手に売るのがわずかばかり採つてゐる人もいて、七月から解禁になる。

それである年、利尻からウニ採りをする漁師を二人頼んで来てウニの加工を始めた。磯舟二隻でウニ採りをしたが、ウニがいっぱいあるのに採る人もいないので半日漁すると磯舟が二つぱいになり、午前と午後で磯舟四はい分にもなるのでその処理に困るほどであつた。

ウニは全部塩ウニに加工してから樽詰めにし、主に東京の商社へ出荷した。

残つたウニの殻は天日で干してから粉碎し、果樹類の肥料として余市などに出荷していたが重宝がられたようだ。

—— つづく ——

短歌

吉平町岬短歌会

海に向く崖一面に咲くキスゲ昇る朝日に色あざやけく
ニツカウイスキー創設者竹鶴氏の旧宅あり諸木うつそうたる
中に

池田 テル

久びさに同級生等集ひ来し神威岬の紺碧の海り
生演奏の琴の音にうつとりと今宵ひととき我を忘れぬ

田中 香苗

夏祭り近付きたれど病む身には家のめぐりの草も引き得ず

奥山 きよみ

外泊し家に帰ると野も山もみどりに変わり我を迎へぬ

竹内 コト



吉平ホトトギス会

大根蒔く仕度ととのへ雨を待つ 斉藤 波留

炎天の大海原をフェリー行く 山口 悦子

新しき墓を包みし蟬しぐれ 越野 敏雄

のび過ぎし枝が邪魔なる合歓^{ネム}の木よ 大和田 絵伊

信号機自動車連なる夏積丹 関口 勝志

流れこむ人それぞれの夏の駅 仲谷比呂古

菩提寺の杜の緑によく映えて白鷺ふた羽相寄りてゐる

鈴木 時子

廃坑の入口より見上ぐ山の上にエゾカンゾウのひとつと
咲けり

丹後 初江

運動会に児童代表の挨拶する孫の齒切れよく澄む声たかし

堀 典子

夫の煮る味噌汁の香り流れ来て前畑に朝の除草を終へぬ

東 美知

萬緑ののり出してゐる岬かな 越野 清治

秋雀一氣に餌をめがけ飛ぶ 室谷 弘子

青芝を二三歩あゆむ孫の笑み 泉 清三

福井幸平 五句

天空をのぞく番屋の大夏炉

巢造りの始まっているつばくらめ

今も尚火種くすぶる大夏炉

今は宿火種たやさぬ大夏炉

軒下に土くわえ来るつばくらめ



